

「りんちゃんとモンシロチョウ」

春休みになりました。りんちゃんは、おばあちゃんのお家へ一人で泊まりに行くことになりました。

ママと離れるのは少し心配でした。でも、おばあちゃんのお家は東京のお家と違ってお庭が広いから、お花も咲いているし、アリンコやダンゴムシもたくさんいます。それから、大好きなおばあちゃんもいます。

「おばあちゃんのところへ行ったら何して遊ぼうかな。」

泊まりに来た次の日、キッチンにいろいろな春の野菜たちが入った黄色い買い物カゴが置いてありました。

カゴの中には、ブロッコリー、ハウレンソウ、土のついたニンジン、そしてところどころ穴の空いたキャベツが入っています。

「わー。お野菜がいっぱい。りん、お野菜大好きだよ。おばあちゃん、お料理してね。」

「はいはい。りんちゃんはお野菜が好きでお利口だね。お肌がツルツルになるね。」

その晩、テーブルには、色とりどりの野菜料理がたくさん並びました。りんちゃんはもちろんいっぱい食べました。翌朝、りんちゃんが、ヨーグルトを取りにキッチンに行くと

「あ、チョウチョウ…」

「お家の中にチョウチョウがいる。」

りんちゃんはびっくりしました。

「おばあちゃん。」

「おばあちゃん、見て、見て！」

「おや、モンシロチョウだね。窓は閉まっているし、どこから来たんだろう？あっ、そうだ。きっと、あのキャベツだ。」

「キャベツ？」

「穴が空いていたキャベツ、まだそのカゴの中にあるでしょう。」

そのキャベツはちょっぴり特別なキャベツでした。高台の畑で野菜作りを頑張っているお姉さんが配達してくれたものでした。

「キャベツの中に、きっと卵から孵ったアオムシがいたんだよ。そのアオムシがキャベツをいっぱい食べて太っちゃくなって何日もキャベツの中で寝てたんだね。そうして、目が覚めてチョウチョウになって飛んでたんだよ。」

「ふーん、そうなんだ。」

「あの白いチョウチョウはモンシロチョウっていうの。」

「モンシロチョウ？」

「白くって、羽に黒いてんてんがついているでしょう？」

「うん。」

「りんちゃん、よかったね。あのモンシロチョウが、目が覚めて、初めて飛べた日に会ったのがりんちゃんだったんだね。」

りんちゃんはなんだか嬉しくなりました。

「じゃ、お外に放してやろうか。」

「・・・うん。モンシロチョウさん、お友達のところへ飛んで行ってね。元気でね。」

「りんちゃんとモンシロチョウ」より

「彼らは孤独ではない」

今夜ここにいて、この「コミュニティ」の一員であると認めていただけることは、私にとって大きな名誉であり特権です。私は「コミュニティ」という言葉と複雑な関係を築いてきました。私はその言葉を受け入れるのに時間がかかり、ためらい、疑っていました。長年、私のような人間にとって、つながりやサポート、強さや温かさといったものがその言葉の中にあることを受け入れられなかった、あるいは受け入れたくありませんでした。それには理由があります。私はこの国で生まれたわけではなく、特定の宗教で育ったわけでもありません。私は混血で、ゲイです。今夜ここにいらっしゃる皆さんの多くと同じように、私はいわゆる「サバイバルモード」で育ちました。サバイバルモードのときは、1日を無事に過ごすことに集中します。そして、5歳、10歳、15歳のときにそのモードになると、「コミュニティ」や「私たち」や「私たち」といった言葉を入れる余地はあまりありません。あるのは「私」と「私自身」だけなのです。実際、「私たち」や「私たち」という言葉は、5歳、10歳、15歳の私には外国語のように聞こえただけでなく、嘘のように聞こえました。なぜなら、「私たち」や「私たち」が本当に存在し、本当に誰かが見守って耳を傾け、気遣ってくれていたなら、私は今頃救出されていたでしょう。また、今夜ここにいらっしゃる皆さんの多くと同じように、私は成長期に標的にされていました。正しい話し方、正しい立ち方、正しい手首の持ち方。毎日がテストでした。そして、失敗する方法は千通り、自分を裏切る方法は千通りありました。他人の基準で許容されるもの、普通であるものに従って生きてはいけません。そして、そのテストに失敗すると、それは確実でしたが、感情的、心理的、身体的に代償を払わなければなりません。そして、皆さんの多くと同じように、私はその代償を払いました。さまざまな方法で何度も。初めて自殺を図ったのは、15歳のときでした。家族が週末に出かけるまで待ちました。そして、家の中に一人でいた。そして薬の瓶を飲み込んだ。その後数日何が起こったかは覚えていないが、月曜日の朝、私は学校に戻るバスの中で何も問題がないふりをしていたことは確かだ。そして誰かが、あれは助けを求める叫びだったのかと私に尋ねたとき、私は「いいえ」と答えた。なぜなら私は誰にも話していないからだ。助けを求める叫びは、助けを求める叫びがあると信じているときだけであり、私はそうは思わなかった。私は逃げ出したかった、私は…「消え去りたい」と思った。数週間前、サンクトペテルブルク国際映画祭への招待を辞退する手紙を書いていたとき、頭の中で小さな声が、誰も気付かないだろうと主張した。誰も見ていないし、聞いていないし、気にかけていない。しかし今回、ついにその声が間違っていると分かった。私が真実を語り、私の小さな物語をもっと大きく重要な物語に統合したこの手紙に、一人でも気付いてくれる人がいればと思った。送る価値がある。「誰も私にしてくれなかったことを、他の誰かにさせてくれ」と思った。"ありがとう"。

「三匹の子ぶた」

わらで家を建てた豚を見たら、何と言いますか？ それを見た狼は唇をなめ、「子豚さん、子豚さん、入れてくれ!」と言いました。

子豚は祈り始めましたが、狼は子豚の家を吹き飛ばしました。彼は叫びました。「ベーコン、豚肉、ハム! ああ、私はなんて幸運な狼なんだ!」子豚はあっという間に豚を食べてしまいました。驚いたことに、すぐに彼は豚のための別の小さな家を見つけました。そして、それは小枝で建てられていました! 「子豚さん、子豚さん、入れてくれ!」

狼は吹いて吹き始めました。子豚はキーキー言い始めました。そしてすぐに豚は彼のお腹の中に入りました。

「ジューシーな子豚が2匹!」狼は叫びました。「でもまだ満足できない!」

狼は別の家に近づきましたが、この子豚3号は、とても賢くて頭がよかったです。彼にはわらも、小枝も木の枝もありませんでした。この豚はレンガで家を建てました。狼は息を切らして息を吹きかけ、何度も何度も吹きました。家は新品同様に残りました。

「吹き飛ばせないなら、ダイナマイトで爆破するしかない!」

豚は電話を取り上げて叫びました。できるだけ早く赤ずきんの番号にダイヤルしました。

「こんにちは」と彼女は言いました。「助けて欲しいの、お嬢さん! 以前にも狼を相手にしてきたことは知っていますが、今、私の家のドアに一匹狼がいます!」 「愛しい豚さん、髪を洗い始めたばかりです。でも乾いたらすぐに行きます。」

しばらくして、森を抜けて、勇敢なお嬢さん乗馬フードが大股で歩いてきました。乙女のまぶたが再びぴくっと動きました。彼女は下着からピストルを取り出しました。

もう一度、彼女は急所を撃ち、一撃で彼を殺した。豚は叫んだ。「よくやった、乗馬フードさん!」

ああ、子豚、あなたは今のところ決して信用してはいけない、乗馬フードさんは、狼の毛皮のコートを2着持っているだけでなく、あちこち出かけるときには豚の毛皮の旅行用ケースを持っていることに気付いた。

「マリアの人生」

「どうか子供たちを厳しくしつけてください」とトラップ大尉はマリアに言った。

マリアは彼の言うことを聞かなかった。彼女は子供たちに歌を教えた。彼は彼女のやり方が気に入らなかった。しかし、彼らの楽しい歌がゆっくりと大尉の考えを変えた。

「あなたは私の人生を変えた、マリア」とある日彼は言った。「ずっと私たちと一緒に暮らしてくれる？」

彼女は考え続けた。子供たちは彼女をとて気に入り。そしてついに彼女は「はい」と言った。

ある日、夫はナチスから電報を受け取った。彼は私たちにこう言った。「明日は彼らに会わなければならない。彼らに「ノー」とは言えない。今夜オーストリアから出なければならない」

私たちはアルプスを越えてイタリアに逃げた。当時私は9人半の子供がいた。イタリアで私たちは生計を立てるために歌い始めた。私たちの趣味は今や私たちの仕事となった。私たちはパーティー、誕生日、結婚式で歌った。

イタリアの人々は私たちに冷淡だった。彼らは「トラップ一家はユダヤ人ではない。彼らはヒトラーのスパイだ！」と言った。

それで私たちはフランスに行った。しかし、そこでも同じことが起こりました。彼らは私たちを歓迎しませんでした。

私たちはヨーロッパを離れ、アメリカに行きました。私たちは再び歌で生計を立て始めましたが、アメリカ人も私たちを好きではありませんでした。

「なぜ彼らは私たちに冷たいのか」と私たちは思いました。「私たちはまだ十分ではないのかもしれませんが。」

ある日、デンバーでステージで歌っていたとき、ハエが口の中に入りました！私はとても驚いて歌うのをやめました。

私は前に出て観客に言いました。「ハエを飲み込んだので歌を忘れました！」彼らは皆笑いました。私たちも笑いました。

その後、すべてうまくいきました。人々は私たちに微笑みかけ、私たちも微笑み返しました。すぐに私たちは全国でとても人気になりました。

戦後、1950年に私たちはコンサートツアーでオーストリアに戻りました。そこで親戚や友人に会いました。彼らは戦争中のオーストリアでの苦労を私たちに話しました。そして私たちも彼らに私たちの苦労を話しました。彼らは言いました。「私たちは子供たちを失い、あなた方は祖国を失った。」

戦争では勝者はいません。敗者しかいない。

「セレーナ ゴメス スピーチ -We Day Carifornia 2014-」

ここに来られて本当に光栄です。本当に嬉しいです。

私はオタクみたいなもので、自分のスピーチを持ってきましたが、この機会を利用して皆さんと一緒に過ごし、私のストーリーを少しお話ししてもよろしいでしょうか。

私は活動家ではありませんし、世界を変えたり、キャンペーンを主導したりしたことはありません。私がここにいるのは、皆さんがそこから何かを得られるように、私の歩んだ道を話すためです。なぜなら、私は正直でいるのが好きではないからです。これは真実です。私は報道やインタビューに正直でいるのが好きではありません。私は皆さん一人ひとりに直接正直でいるのが好きです。

そして、皆さんは必要な資質がないと言われたり、十分優秀ではないかもしれないと言われたり、十分な数の人があなたをサポートしてくれなかったり、心の底ではそれがやりたいことなのに、そういったことを言われたことがあると思います。

何か素晴らしいことに参加したい、何か素晴らしいことをしたい。

そして、人から「あなたは十分じゃない」と言われたら、息が止まって打ちのめされるだけではありません。

私は、とても恵まれた人生を送っていて、感謝すべきことがたくさんあり、皆さんの多くが私に大きな刺激を与えてくれています。

皆さんはわかっていないと思いますし、十分に言われていないかもしれませんが、皆さんは私にもっと良くなるよう刺激を与えてくれますし、私たちはお互いに刺激し合ってもっと良くなるべきなのです。

私は、私を導いてくれるはずの人々に囲まれています。導いてくれた人もいれば、そうでない人もいます。彼らは私にプレッシャーをかけ、とてもプレッシャーを感じます。セクシーでなければ、かわいくなければ、優しくなければ、これらすべてを手に入れてくれないと。

そして、皆さんも共感できると思いますが、毎日対処しなければならないプレッシャーがあります。

学校、職場、友達、両親、家族、私自身も時々そうだと思います。

彼らは私に何を着るべきか、どのように見えるべきか、何を言うべきか、どうあるべきかを教えます。

最近まで、私はそのプレッシャーに屈していました。

自分が誰であるかを見失っていました。

私は人々の意見に耳を傾け、他の人が私を受け入れてくれると思っていたので、自分を変えようと思いました。

そして、私は自分自身以外の何者でもないことに気付きました。

そして、私が本当にあなたに知ってほしいのは、あなたが世界を変えているということです。私が世界を変えているのではなく、あなたが世界を変えているのです。それは素晴らしいことです！

どうか、どうかお互いに親切にして、愛し合い、人々を鼓舞してください。なぜなら、やってみましょう、やってみましょう！

ゲームを変えましょう、ゲームを変えましょう！

最も重要なことは、私たちが学び、お互いから学び続けることです。

どうか自分に忠実であり続けてください。どうかありのままにいてください。私たちはお互いを支え合っていることを知ってください。私たち全員がお互いを支えています。

屈服することで自分を良くしようとしたことが一度もないと言ったら嘘になります。なぜなら、私はそうしたことがあるからです。でも、自分の行動から学びました。

そして、私がしたことの中で、最も誇りに思っているのは、自分の過ちから学んだことです。

それがどんなものか、皆さんにも知ってほしいです。

どんなタイプの友達がいるか、周りには誰なのかを理解すること。

だから、皆さん一人一人が自分を信じるように、愛し愛されるように刺激できればいいなと思います。

そして、私がここに来て、とりとめもなく話したり、皆さんと話をしたりすることを許してくれてありがとう。皆さんがしていることはとても素晴らしいことです。

自分自身を最も誇りに思ってください。これは素晴らしいことです。

「ありがとう、カカ・ムラド」

2019年12月7日、アフガニスタン大統領と軍服を着た兵士たちがカブールの空港にいました。彼らは日本軍の飛行機に向かってゆっくりと歩き、大統領は最前線に立っていました。彼らの肩には棺が担がれていました。棺にはアフガニスタンの国旗が掲げられていました。中には中村哲の遺体が入っていました。中村哲は1946年、第二次世界大戦が終わった直後に福岡で生まれました。1973年に九州大学を卒業した後、医師になりました。中村医師はパキスタンとアフガニスタンの両方で医師として働きました。彼の医療グループはピース（日本）メディカルサービス（PMS）と呼ばれていました。彼らは基地の病院から多くの医師を派遣し、医療が行き届いていない地域の人々を助けました。彼らの懸命な努力のおかげで、多くの命が救われました。しかし、中村医師は少しずつ、貧困のために多くの人が病気になっていることに気づきました。十分な食べ物も、飲むためのきれいな水もありませんでした。中村医師の薬ではこれらの問題を解決できませんでした。彼は、別の方法で人々を助け始める必要があることを知っていました。しかし、彼に何ができるのでしょうか？

2000年、アフガニスタンで大規模な干ばつが発生しました。中村医師と彼のチームは、地元の村人や日本からのボランティアとともに、飲料水を供給するための井戸を掘り始めました。2000年には、長さ25キロメートルの運河が完成しました。この運河と他の8つの運河は現在、この地域の65万人以上の人々を助けるために使用されています。水を通じて、人々の生活は大きく改善されました。中村医師が言ったように、「1つの運河は100人の医師よりも多くの利益をもたらします。」アフガニスタンでは、中村医師は尊敬されていただけでなく、愛されていました。実際、人々は彼への愛情を示すために彼を「カカ・ムラド」と呼んでいました。そのため、銃を持った男たちのグループに彼が殺されたとき、多くの人々がショックを受けました。中村医師はアフガニスタンの人々に薬や水以上のものを与えました。彼は人々に協力し合い、自活する方法を教えました。彼の死後、チームは彼の長年の努力を無駄にしたくなかったため、すべてのプロジェクトを継続することを決定しました。彼は亡くなりましたが、「暗い隅に光を当てる」という彼の生涯の使命は今も生きています。ありがとう、カカ・ムラド。